

北海道大学病院 神経内科 工藤 彰彦

みなさんこんにちは。

神経内科後期研修医 4 年目として大学病院で病棟を中心に働いている工藤と申します。

みなさんは「〇〇（医学部進学、初期研修先の病院など）を選んで良かった」と思う瞬間はありますか。

私はまず神経内科を選んで良かったと思ったことをこの場をお借りして書きたいと思います。

私は後期研修医 1 年目の時、脳炎の患者さんを初めて担当しました。入院後すぐに呼び掛けに反応がなくなり、呼吸が止まりそうになるほど激しい炎症が脳に起きていました。諸先輩方に助けて頂きながら治療を行い、幸いその方は自力で呼吸が出来るようになり、目が醒めていきました。その患者さんはリハビリのために他の病院に転院しました。転院前に車椅子に乗って少し朦朧としている患者さんから「自分は治るのか？」と聞かれた時、私はこの方が元の生活に戻る事が出来るのか、確信が持てませんでした。

その翌年、市中病院で働いていたある日、「会いたがっている患者さんがいる」と教わり、外来に行くとそこには自分の足で歩いて会話出来る患者さんがいました。

「良くなったよ、ありがとう」

患者さんからそう言われた時、私は神経内科医という道を選んで良かったと思いました。

一方で、全ての患者さんがこのように良くなる訳ではないというのが現実です。

特に神経内科は、治療法のない難病の患者さんと長く向き合う力が求められる事もあります。難病の患者さんからは時々「本当に治療法はありませんか？」と聞かれます。「治せないなら病院に通う意味はないじゃないか」と厳しく言われた事もあります。その間にどう答えていくかが、後期研修を終えた後の自分の課題になるのだと最近は思っています。

希望的な話をすると、4 年間神経内科医として研修していますが、その短い期間の間に神経難病に対する新しい治療薬が続々と発売されていくの間近に見ました。治せなかった病気が治るようになっていくのを見ると、ロマンを感じます。神経内科という診療科は 10 年後、20 年後には今とは違う見え方の科になるのかもしれませんが。

一緒に神経疾患の克服というロマンを求める仲間が 1 人でも増えてくれたら、これ以上の喜びはありません。北大神経内科でお待ちしております。

2020 年 11 月